

学校とは何なのか

—不登校・いじめの向こうに見えるもの—

精神保健協会理事、のびる学園長・渋谷照夫

本誌の前号（104号）の拙文で、コミュニティ・スクールの推進には、生涯学習理念の正しい理解が不可欠だという私の考えを申し上げました。

平成2年（1990年）に生涯学習が法制化されて、学校が地域の学習拠点の一つとして位置づけられました。文部科学省がいう「地域と共にある」学校としてのコミュニティ・スクールが言葉としてのスタートをしました。

これが生涯学習理念の下で実質的な推進をしていたなら、その後の学校の危機的状況は回避できたのではないかと私は考えています。残念ながら今や学校の危機的状況は、子どもや若者たちの損傷あるいは破壊にまで進展してしまっています。

文部科学省の不登校・いじめ情報などの推移に学校の危機的状況が現れています。最新の2021年度実施の結果（22年10月27日公表）によると、病気や経済的理由などとは異なる要因で30日以上登校せず「不登校」と判断された小中学生は24万4940人で過去最多。小中高と特別支援学校のいじめの認知件数は61万5351件でともに過去最多でした。自殺者は小中高で368人となり、過去最多の前年度に次ぎ二番目の多さでした。

子どもの数が年々減少しているのに不登校の数は増加し続けているのです。前号でも紹介しましたが、今から34年前（1988年）に私が不登校の子どもたちの居場所としてのフリースクールをはじめた時と比較してみると、怖ろしいほど激増しています。

その時の文部科学省の公表では小中学生の不登校は約3万人でした。3万人といえば500人規模の学校60校の生徒全員が不登校になった計算です。一般の会社なら倒産だと深刻に受け止めて、新聞やテレビで大きく取り上げられました。私が始めたフリースクールが茨城県で最初の不登校の居場所として茨城新聞のトップ記事になったほどでした。

国も行政も学校関係者も対策の必要を感じ、金と時間を費やして対応した

はずです。しかし、その後子どもの数は減り続けているのに、不登校の数は減少するどころか増加し続けています。34年前の不登校が、500人規模の学校60校の全生徒の人数だと知って大騒ぎでした。ところが現在の不登校は500人規模の学校490校の全生徒数にまで拡大してしまっています。しかも、いじめが原因で自殺に追いやられる痛ましい事件も増えています。子どもの命が脅かされる最悪の環境になっている今の学校とは一体何なのでしょう。不登校・いじめの向こうに見えるものを追求しなければなりません。

適応指導という暴力

平成2年（1990年）の春に、私はNHK水戸放送局から取材の依頼を受けました。要件は、この春から茨城県ではじめて公的な不登校の居場所がスタートすることになったとの報せと、そのことをテレビで紹介するにあたり既に2年前から始めている私が主宰している民間のフリースクールを一緒に紹介したいとのことでした。その際には公的な居場所へのご意見も伺いたいと言われました。

収録に来たアナウンサーからの説明は以下のような内容でした。公的な不登校の居場所は「適応指導教室」という名称で、不登校が長期化した児童生徒に対し、その学校復帰を支援するための相談、指導に携わる施設であること。水戸市内に開設する最初の教室を「梅の香広場」という名前で始める予定とのことでした。

私は、不登校に公的な居場所を提供する試みは是とした上で、意見を二点申し上げました。一つは「適応指導教室」という名称が不適切であることです。日本の学校が百年以上経過して、旧態依然の学校制度が今の子どもたちに合わなくなっているのです。子どもを学校に合わせる（適応させる）のではなくて、時代の変化に合わなくなっている学校の方が子どもに合わせて変わる（適応する）べきです。学校を変えないで子どもを学校に合わせるのは非力な子どもへの暴力です。

二つ目は、「学校復帰」を目的にしているのは不登校対策として充分ではないということです。不登校になる原因はいろいろありますが、一番多いのは人間関係です。友達や教師からの、いじめや体罰などが原因の場合は学校

復帰で自殺など命の危険もあります。「学校復帰」を目的にするのではなく、一人一人の子どもの心の悩みに耳を傾けて人間関係を理解することです。目的は「学校復帰」とするのではなくて「子どもの生きる力の再生」とすべきです。子どもの生きる力が蘇って、子どもの希望で学校復帰するのであればよいと思います。

以上、私の意見二点は放送されましたが、学校関係者が参考にしてくれた様子はまったくありませんでした。私が不登校の居場所の目的としたのは「子ども自身の自立」です。つまり、自分の人生を自分の頭で考え、自分の足でしっかり歩くこと、それができるようになれば、あとの進路は自分で選択すればよいのです。学校に戻ることも、学校とは縁を切って、フリースクールやアメリカのホームスクーリングのような所などでも学べる。どこにも所属しないでエジソンのように自宅で独学することも可能です。大切なことは、不登校になった子どもの「今」を理解することです。学校の人間関係で疲れていることが多いので、心身の疲れを癒すことが先決です。これは人によっては何年もかかることがあります。可能であれば周りの大人が豊富な情報を提供して選択肢の支援をすることで「学び方を学ぶ」という生涯学習理念を生かすこともできます。

校内暴力は水俣の猫

私が不登校問題に関心を持ち始めたきっかけは40年前（1982年）に茨城大学で開催された金沢嘉一さんの講演会の時でした。東京にいた頃、私は金沢先生のお宅に時々伺って教育問題について教えを受けていました。久しぶりで金沢先生にお会いできるのを楽しみに講演会に駆け付けました。

そのときの金沢先生の講演で非常に印象に残ったことがありました。それは、あの頃不登校やいじめの前に校内暴力がものすごく吹き荒れていたという時期でした。その子どもたちのことを金沢先生は「学校で暴れている校内暴力の生徒たちは水俣の猫だ」と言ったのです。工場からの廃棄による有機水銀で冒された魚を食べた猫がもがき苦しんで踊る。毒が原因だと知らない水俣の人たちが変な猫をなんとかしようとした。そういうやり方で校内暴力対策をしてはいけないと金沢先生は警告されました。

ところが周知のとおり、教員採用で体育系や運動部の大学生を多く採用し

て力で抑えつける校内暴力対策をすすめました。校内暴力は短期間で終焉に向かいました。これは、あたかも下からどンドン湧き上がってくる壺の中の水を上から押さえつけているようなものです。当然のように壺がひび割れてジワジワと漏れ出てきます。校内暴力を無理やり押さえつけたあとに当然のように出てきたのが、不登校と陰湿ないじめでした。

この講演会を主催したのは「子どもの人権を守る会」という団体でした。教師の体罰が原因で死亡した中学生の裁判を支援しているとのことで、私は即日入会させてもらいました。話によると当時の学校では教師の体罰は暴力ではなく「愛のムチ」だとされていて、教職員組合も黙認しているとのことでした。

子どもには人権がない？

その頃の私の家庭には小学生の息子と娘がいて私は子どもたちの学校のPTA役員をしていました。その学校の運動会のあとで教師と役員による慰労会があり私も参加しました。宴会場となってホステスさんと化した役員的女性たちが校長先生を囲んでお酌をしながら談笑している時のことでした。酔いが回ってきた校長先生が気になる発言をしたのです。

「最近、子どもの人権なんてバカな事をいう人権屋がいてあきれているよ」私が子どもの人権を守る会の会員なので、当てつけに言ったのかと思いましたが、そうではないようでした。ところが、更に自信満々で断言したのです。

「子どもに人権なんかないんだよ。子どもは親に保護されているからね。人権を行使できるのは親で子どもは保護の対象なんだ。」私は大学で法律の勉強をおろそかにしてきたので、そんなはずはないと思

ましたが反論ができませんでした。翌日、子どもの人権を守る会の会員である茨城大学法学部教授の研究室を訪ねて確かめました。教授は書棚から分厚い本を出して言いました。「これは今の日本でいちばん詳しい法律の辞書です。この中に人権という項目の解説は何十ページもありますね。

しかし、子どもの人権についてはどうですか？」なんと、たった一ページだけ、それも数行さらっと書かれているだけでした。「残念ながら校長先生の言った通りです。子どもの人権は今の法律家の頭の中にもあまりないのです。だから我々は少数派だけど頑張っているのです。」そう言われてみると、子

どもは人身売買、墮胎、虐待など親の持ち物のような扱いを受けている現実があることに気づきました。児童福祉法などには、「子どもは保護しなければならない」という文言があり保護の対象であるが、人権の対象とはなっていません。

この7年後（1989年）第44回国連総会で「子どもの権利条約」が満場一致で採択され、翌年発効しました。これは人類史上初の国際的な子どもの人権に関する条約です。私たち「子どもの人権を守る会」は一日も早く日本がこの条約を批准するよう運動しましたが、日本が批准したのは5年後でした。紙数の都合で詳しく書けませんが批准が遅れたのも、批准後の日本の教育現場での条約の無理解さも、日本の学校が「子どもの権利条約」に反する内容が多いためでした。私那不登校の子どもたちの居場所をスタートしたのが「子どもの権利条約」の採択の前年（1988年）でした。私は不登校の基礎知識がなく失敗の連続で壁にぶち当たっていました。

講演会から居場所づくりへ

私那不登校の子どもたちの居場所を主宰することになったのも「子どもの人権を守る会」がきっかけでした。この会が主催した講演会に、東京でフリースクール「東京シュール」を主宰している奥地圭子さんを講師に招きました。わが子の不登校に悩む人たちが県内から百人以上集まりました。熱心な質問が続き会場を移動して継続したほどでした。私は、学校からも親からも追い詰められて行き場がない不登校の子どもたちの悲鳴を感じました。そこで、不登校の子どもたちの駆け込み寺のような逃げ場が必要だと思いました。「子どもの人権を守る会」でフリースクールを茨城につくりましょう、と提案しましたが会社員などが多いので無理とのことでした。仕方がないので私が経営している学習塾の部屋が昼間空いているので不登校の居場所に使ってもらうことにしました。34年前（1988年）のことで、茨城県では最初のフリースクール「しんゆうしゃ伸友舎」の誕生でした。

「子どもの人権を守る会」の会員は協力者としてボランティアで授業などをすると約束してくれました。元教師の主婦や学習塾の教師、大学教授など優秀な人材の集まりである会員です。伸友舎に不登校の子どもたちが十数人

になった頃に授業を計画してみました。親たちは大賛成、ところが子どもたちは喜びません。なぜだろう？私の頭が学校化していたことに気づきました。学校で傷つき疲れ果てている子どもたちに、あろうことか学校を提供したのです。今子どもたちに必要なのは、「休息」だったのです。一事が万事で不登校に無知な私は失敗の連続でした。そこで、学校にマインドコントロールされている自分を変えるために価値観の違う国へ行くことにしました。その国とはメキシコです。

子どもたちとメキシコ生活体験

仲友舎の世話人は学習塾の経営者の私と塾長の黒沢君夫妻。黒沢君はアメリカの大学在学中に同級生のメキシコ人女性のマリアさんと恋愛結婚して帰国後すぐに塾長になってもらいました。昼間のフリースクールは、黒沢夫妻の明るく自由な雰囲気です。不登校の子どもたちの心を癒してくれていました。日本の学校とは価値観が違うラテンアメリカの魅力を私は感じていました。私の学校化した石頭を変えるためにもメキシコでの生活体験をしてみようというプランを立てました。メキシコを選んだ理由はもう一つありました。

「脱学校の社会」の著者イヴァン・イリッチの研究所がメキシコにあり、世界中の学者が集まっていました。日本から行った人もいて、素晴らしい本を出しています。山本哲士著「学校の幻想・幻想の学校」という本です。

経済的負担を軽くするためアパートを借りて二週間の共同生活を計画しました。不登校の小中学生5人と世話人など大人7人の計12人で出発しました。この二週間で私も変わりましたが、子どもたちは驚くほど変わりました。

何のスケジュールもなく毎日暮らしてもいいと思っていましたが、ある日マリアさんの父親が子どもたちのために庭先で手作りの焼肉パーティーをしてくれました。庭先といっても日本のように門や塀などはない道路の脇なのです。「いい匂いだね」「楽しそうだな」と話しかける通行人にマッチョのマリアさんの父親が「一緒にやろうぜ」と誘います。どんどん人が増えていきました。その中に大男のアメリカ人がいて「この日本人の子どもたちは、どうしてここにいるの？」と問いかけました。私は不登校の英訳スクール・

フォービア（学校恐怖症）を使いたくなかったので「この子たちは学校に行っていないのでヒマだから来たのです」と答えました。すると彼は「それはいい、みんなで私の学校に遊びに来てよ」と言いました。私たちがステイしていたアクアプリエタという町は、メキシコとアメリカの国境近くにあります。彼は国境近くのアメリカのフーバー中学校の副校長でした。私たちは軽い気持ちで、「じゃあ行きます」と言ったのですが日本の学校を思い出して不安になってきました。日本では「初年度の計画にないので」とか「教育委員会を通してください」などと言われてあきらめる経験をしてきました。

その後、副校長から三日後に来てくださいと電話をいただいたので大きなレンタカーを借りて国境を越えてフーバー中学校に向かって出かけました。運転席の後ろで子どもたちの不安そうな小声が耳に入りました。

「学校っていうところに行くのは久しぶりだなあ」不登校期間は、短い子が1年で長い子は5年です。私も不安になってきました。やはり校内に入ることには出来ませんと言われるかもしれないので「校門の前で学校を外から見るだけでもいいよね」と言いました。

ところが、副校長が玄関前で歓迎の握手。なんと校内放送があり「今から呼び出す生徒は今日一日授業に出なくてよいから日本から来た生徒たちの案内をしてください」とのこと。間もなくニコニコしてやってきたかわいい坊やお嬢さんという感じの生徒たちが日本の子どもたち一人に一人ずつ付けてくれて校内の案内に行ってしまうました。私は心配になりました。英会話の勉強などしてこなかった日本の子どもたちです。しばらくして戻ってきたので聞いてみました。「君たち、相手の話がわかったの？」すると、全員が、「うん、だいたいわかったよ」と笑顔で答えました。言葉はハートなのだ！フレンドリーなアメリカの生徒たちの歓迎に安心した様子でした。

すべての先生たちが心から歓迎

この中学校は全校生徒600人くらいの学校でした。各教科の先生が教室にいて生徒たちが教科ごとに移動して授業を受けるという教科担任制です。私たちは、この学校のすべての学科の授業を見学させていただきました。数学、英語・理科、社会科、音楽などの教室に入ると、すべての先生が笑顔で歓迎してくれたので安心しました。日本の学校なら、急に参観を決めて自分

の教室にドヤドヤ入ってくるのを迷惑がる教師が一人や二人くらいはいます。この学校では、迷惑がるどころか、どの先生方も私に自分の授業についての説明をしてくれました。自分の授業のここに注目して見てもらいたいという自信に満ちた説明です。正直言って、どの科目も欠点がないわけではありませんでしたが、私にはプラス思考の態度がさわやかで、好感が持てました。昼になると、カフェテリア方式の食堂に連れて行ってきて「何でもいから食べていいよ」と言って、副校長のポケットマネーでごちそうしてくれました。午後は体育館などの施設を見学させてもらいました。お別れのときは私たちの車を囲んで大勢の生徒たちが名残惜しそうに手を振ってくれました。私の運転席の後ろで話し声がしました。

「こんな学校なら、毎日来たいなあ」

写真入りの新聞記事で紹介される

フーバー中学校の見学のとき、地元の新聞社からの取材を受けました。翌朝その新聞を見て驚きました。一面に大きな写真入りで掲載されていたのです。写真は私たち日本からの12人と副校長と校内を案内してくれたフーバー中学校の生徒たちの集合写真でした。「こんな写真いつ撮ってくれたの？」という声が出たほど、みんな忙しく動き回って見学をした一日でした。見出しの文字がしゃれていました。日本の生徒たちを「日出ずる国の生徒たち」Students from the Rising Sunと表現してあり、内容も親善大使のようには書かれていました。子どもたちはフーバー中学校で歓待され、新聞でも一面に掲載されて大満足の様子でした。日本では学校から疎外され、家庭では親を悩ませる困った子扱いされ続けてきた子どもたちです。メキシコとアメリカに来てはじめて「認められた」のではないのでしょうか。

私はこのとき自分がメキシコ人やアメリカ人の人たちのように無条件で子どもたちを「認める」ことをしていなかったことに気がつきました。日本の学校の教師も親たちも「認める」場合は条件付きだったのです。「これができれば」とか「これさえやらなければ」いい子なんだがなあ、という条件です。人は認められることによって生きる力が出るといわれますが、それは無条件の場合なのですね。

不登校の子どもたちは、メキシコの社会でもフーバー中学校でも無条件に

認められました。あなたは何も変えなくても、今のままで「十分すばらしい」と認められたのでした。失われていた自己肯定感を充足できたのでしょう。子どもたちは目に見えて生き生きと明るくなり、自信がみなぎってくるようでした。帰国の日が迫ってくると「またメキシコに戻ってきたいなあ」と言うのでした。戻る先は日本のはずです。

しかし、メキシコが居心地よく感じて第二の故郷のように思われているようでした。

親が見違えるほど変わった

成田空港に戻ったとき、出迎えに来ていた小学6年生の男の子の母親がこんな感想を言いました。「うちの子は外国どこか飛行機に乗ったのも初めてだったので、出発の日是不安そうでした。ところが戻ってきたときは胸を張って堂々としていたの、お母さん！と声をかけられて我が子を見違えていたのだと気づきました。たった二週間でこんなに変えてしまうメキシコという国に今度は私も行ってみたいです」

この6年生の子は、帰国後学校に行かない人生を選択しました。中学校の入学式も欠席、三年間の授業を一日も出ないで卒業式に母親が卒業証書を校長室で受け取りました。周知の通り、義務教育では生徒の卒業を決めるのは校長の裁量です。私は、この子の両親と相談して中学校の校長先生に事情を話して理解していただきました。そのかわり自宅で独学をしている状況を丁寧に報告し続けました。中学の卒業証書が出るのを待っていたかのように、この子はいろいろな仕事を見つけて働き始めました。そして、十九歳のとき認められてファーストフード店の店長になりました。両親は学校に頼らずに自立できたことに感謝しています。

ほかの子どもたちの親も異口同音に我が子の成長した変化に驚き感謝していました。私は、子どもたちは無理やり適応指導されなくても、「認め」られて生きる力が蘇れば、羽が生えたように自ら飛び立てるのだということを確認しました。その後、語学の専門学校に進んで働きながら世界中の旅に出かけた子や、保育士を目指して短大で勉強をしている子、東京で調理師の免許をとって料理研究をしている子など、それぞれ自由に自分に合った道を見つけて歩き出しました。

学校がなくても生きていける

メキシコ生活体験で得たものはたくさんありましたが、一番大きなものは「学校がなくても子どもは生きていける」という当たり前のことでした。

「脱学校の社会」の著者イヴァン・イリッチが研究所をメキシコにつくった理由がなんとなくわかりました。イリッチは、オーストリア人で歴史学の博士号取得のあとニューヨークで大学の副学長を勤めました。そのときに、先進国では学校が子どもを苦しめていことに気づいたそうです。そこで国民が学校化しにくい国を選びメキシコに研究所をつくったのかもしれない。

メキシコの学校では授業は午前中で終了して、生徒たちは午後から地域の商店などで働いていました。まさに、「働きつつ学ぶ」という生涯学習理念の実践でした。また、落第をしている生徒が多いのに驚きましたが、理由を聞いて納得しました。病気などで欠席が多い子どもに学習機会を再度与えて学力の遅れを取り戻すための落第でした。これも「どこで学んだか」という学歴ではなくて「何を学んだか」という学習歴に価値を置く生涯学習理念に通じる考え方です。

「学校の幻想・幻想の学校」の著者、山本哲士は教育内容の押し付けが、子どもの学力をのばすのだというあり方を「学校化された教育スタイル」と呼んでいます。他者から与えられることはこなせるが自分で自分のことを決定出来ない依存的・受容的な人間をつくる教育スタイルです。この教育スタイルが蔓延すると「学校で過ごす時間が長ければ長いほど、学歴が高ければ高いほど、人間は賢くなるのではなくてなく愚かになっていく」と言っています。

私は、日本社会にはびこる旧態依然の学校をどうすればよいかについて、生涯学習理念を日本に紹介されてきた波多野完治先生に尋ねてたところ、

「脱学校と言っても、イリッチだって学校はない方がいいと思っではないのです。今のような学校なら、ない方がいいと言っているんだね」と答えられたのを思い出して、今の学校と付き合いざるを得ない今の子どもと親の苦勞を思わずにられません。法制化された生涯学習の下で、学校が地域の学習拠点の一つとして位置づけられ、言葉だけではなくて真の意味で

「地域と共にある」学校になるために学校を変革する勇気を持つことが望まれます。